上小倉横穴墓

大分県南海部郡弥生町大字上小倉
所在の横穴墓発掘調査報告

弥生町文化財調査報告書第１集

1991

弥生町教育委員会

序　　文

番匠川の中流がその清らかな流れをゆったりと横たえ、流れに沿った肥沃な土地のひろがる山里が弥生町であります。温暖な気候と狭いながらも沃野に恵まれ、さしたる山岳もない関係上穏やかな町民の気風がみなぎっているのは当然なことと思われます。

上小倉横穴古墳群は、この町のほぼ中央部に位置する雨龍山という小高い丘の上山麓に点在しておりますが、この古墳群のしたに佐伯氏ゆかりの磨崖石塔群があることから、この辺りに強力な支配者が存在したことと、文化の中心地であったことなども想像されないことはありません。

この古墳群のある丘陵は凝灰岩で、古墳群のすぐ下に人家が密集しております。古墳群周辺の風化が進み、木の根が露出し、岩肌に亀裂が入れば人家は危険にさらされるという予想は容易にできるわけです。この意味あいから急傾斜の危険防止工事の指定を受けました。現状のままで工事を進めるようになれば本町唯一の古墳群や磨崖石塔群が破壊をこうむることになります。

このような事態に直面いたしましたため、弥生町教育委員会といたしましては、早急に調査のうえ工法等の検討をして頂くことになりました。幸いにも、地権者、県教育委員会文化課の方々のご協力により作業が円滑に行われその成果が本報告書に納められました。

ただ台風20号接近時による風雨のため作業に困難をきたしましたことは否めないことで、調査員の方々にもおもわぬ苦労をおかけすることになりました。

この調査は緊急なものであったためごく一部にしかすぎませんが、本調査が残された多くの古墳の全容を類推するためにも非常に大きな価値があっただろうと想像いたします。

本町には、文化財愛護婦人団まで結成され、文化財に対する町民の意識は高まろうとしております。本調査がさらにその機運を助長してくれることを期待してやみません。

最後になりましたが、県教育委員会文化課の方々のご協力とご指導ならびに地権者のかたがたに衷心より敬意と謝意を表する次第であります。

平成３年３月

弥生町教育委員会
教育長　宮　脇　和　敏

例　　言

1．本書は弥生町教育委員会が平成2年度に実施した大分県南海部郡大字上小倉所在の上小倉横穴墓群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は弥生町上小倉地区急傾斜地区崩壊対策事業に伴うもので、弥生町教育委員会が主体となり、大分県教育庁文化課高橋徹が調査を担当した。

3．遺構、遺物の実測・撮影は、出納、高橋が行った。

4．本書の執筆は高橋、出納で分担し、製図は井口あけみがおこなった。編集は井口の協力を得て高橋が担当した。

目　　次

本文目次

I　調査の経過 …… 1
II　遺跡の位置と環境 …… 2
III　遺構 …… 2
IV　まとめ …… 4

挿図目次

第1図　弥生町位置図 …… 1
第2図　上小倉横穴墓位置図 …… 3
第3図　上小倉横穴墓周辺地形図 …… 4
第4図　上小倉横穴墓配置図 …… 5
第5図　3号横穴墓実測図 …… 6
第6図　4号横穴墓実測図 …… 7
第7図　5号横穴墓実測図 …… 8
第8図　6号横穴墓実測図 …… 9
第9図　8号横穴墓実測図 …… 10
第10図　関連遺物実測図 …… 11

図版目次

図版1　調査風景
図版2　4号横穴墓羨門の床面，4号横穴墓正面
図版3　5号横穴墓正面，6号横穴墓（調査前）
図版4　4号横穴墓の奥壁，8号墓床面の排水溝

Ⅰ　調査の経過

弥生町の上小倉地区は、阿蘇火山の噴出物である凝灰岩からなる急傾斜地がおおくあり、近年風雨、草木根などによる崩壊が進んでいる。そのため平成元年度より大分県佐伯工事事務所によって、急傾斜地崩壊対策工事が行われている。

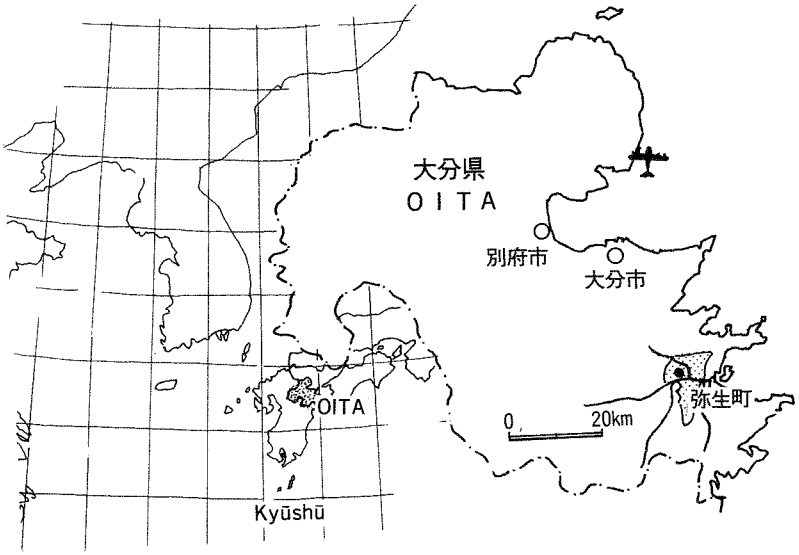
平成２年度工事箇所には、町指定文化財の上小倉横穴墓群や県指定文化財磨崖石塔などがあり、文化財保護と災害防止の両立を計るべく、町教育委員会、県土木、佐伯工事事務所、県教育委員会および地元関係者で協議を重ねた。数度の協議の結果、とりあえず磨崖石塔付近は平成２年度事業対象地区から除外し、工事予定地区についても極力横穴墓を避けて擁壁工事を行うことになった。工事にかかる横穴のみを調査対象にし、最終的には６基にしぼったがそのうち１基は防空壕であることがわかり除外した。

発掘調査は平成２年８月31日～９月25日にかけて実施し、延べ11日間を要した。

調査団の構成

調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	弥生町教育委員会		
総　括	弥生町教育委員会	教育長	宮脇和敏
調査事務	〃	社会教育課長	井上義輝
	〃	社会教育主事	出納　司
調査担当	大分県教育庁	文化課主査	高橋　徹



第１図　弥生町位置図

II　遺跡の位置と環境

上小倉横穴墓は大分県南海部郡弥生町大字上小倉にある。大分県南部を東西に流れる、県南最大の河川番匠川が大きく南に曲がり、北から南下してきた江崎川と合流する当該地区には狭小な沖積平野が形成されているが、この両河川に挟まれる位置に独立状の一小丘陵が存在する。通称雨龍山と呼ばれており、阿蘇火山に起因する安山岩および溶結凝灰岩から成るものである。その基部は河川等の侵食をうけ急傾斜の崖面となっている箇所が多い。上小倉横穴墓群はこの丘陵東側崖面に、南北180mにわたって営まれている。総数およそ36基を数え、正確な数は不明である。弥生町内には他に横穴墓や古墳の類は知られていない。

参考文献　　小田富士雄、賀川光夫『豊後南海部郡の磨崖石塔群』弥生村教育委員会、1961

III　遺　　構

今回調査した地点は横穴墓群北端の一群で、2号、3号、4号、5号、6号、8号横穴が調査対象となった。2号横穴は防空壕であることがわかりこれは除外した。調査地点は崖面が崩壊したあとを平担に均し畑地として使用されていた場所で、この平担地の奥壁に相当する崖面に3号、8号横穴があり、平担地前面の崖面、および人家の裏の崖面に4号、および5号、6号横穴が位置している（**第3図，第4図**）。

3号横穴墓（第5図）

玄室の奥壁部を残して大半が削平されている。玄室の壁面には数箇所後世のものと思われる凹が見られる。玄室床面の平面プランは奥壁に向かってやや幅を狭めるもので、奥壁幅約130cmを測る。奥壁は床面から50～60cm上方に立ち上がり、その後、緩やかに内湾しながら天井部へ続く。床面はほぼ平担で、排水等の施設は認められない。調査時点で横穴内部は土砂で埋まっており、その排土から遺物は出土しなかった。

4号横穴墓（第6図）

テラス状平担部の北東隅、崖面を削り出して作った階段の上部に位置する。飾り縁を持つ羨門の正面プランは隅丸の長方形である。前庭部は南側に軽く傾斜し、その端に一条の排水溝が設けられている。羨門の床面には2条の溝があり、あるいは扉石を据えるためのものかもしれない。羨道部は長さ70～80cmで、玄門部から羨道部にかけての床面に一条の排水溝がはしる。

玄室床面の平面プランは不整円形を呈する。床面はほとんど平坦で水平と言ってよい。天井

第２図　上小倉横穴墓位置図　S＝$\frac{1}{5000}$

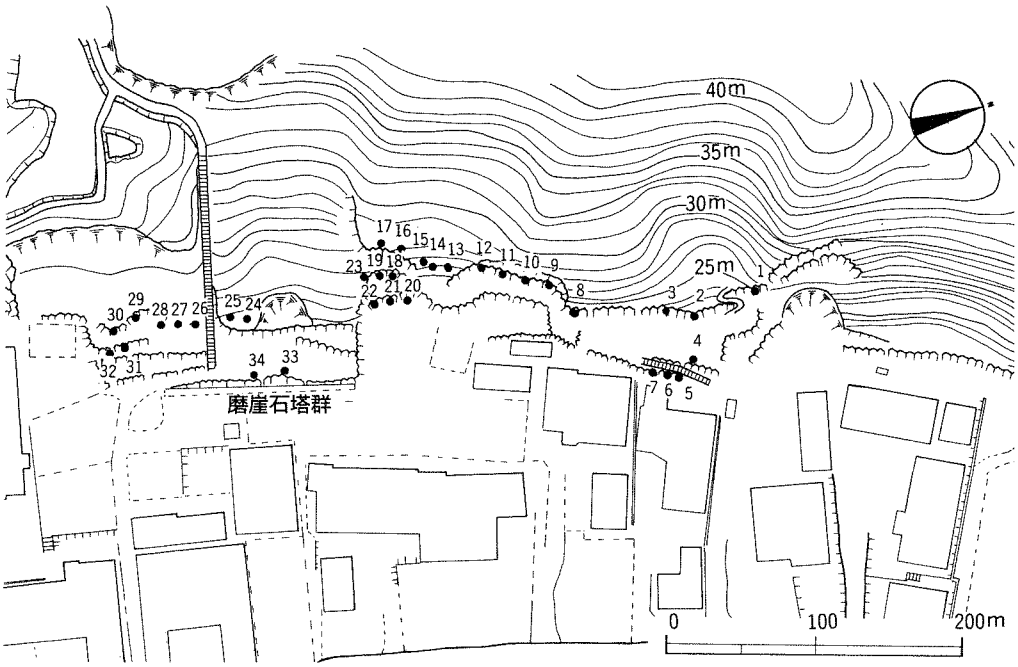
部は比較的低く、最大で100cmを測る。玄室横断面はカマボコ状を呈する。

５号横穴基（第７図）

３号横穴墓下方の床面にあり、６号横穴が南側に隣接する。飾り縁の羨門は下部がわずかに幅広い隅丸長方形の正面プランを呈す。玄室平面プランは玄門部付近が最大幅で奥壁部に向かって滑らかにカーブする。天井部の高さは、玄室中央よりやや奥壁寄りの地点が最高で、そこからなだらかに羨道部天井へと続く。玄室床面中央部の床面から羨道部へ一条の排水溝が設けられている。

６号横穴墓（第８図）

５号横穴墓の南側に隣接する。玄室床面は不整の円形状プランで、羨道部が玄室南側にややかたよって設けられている。羨門部、前庭部は２段の階段状を呈する。排水溝等で玄室の1/4ほどがベッド状に画されているが、床面との段差はそれほど大きくない。玄室北側に伸びる浅い



第３図　上小倉横穴墓周辺地形図　　S＝$\frac{1}{500}$

溝は横穴墓構築時のものではないと判断する。

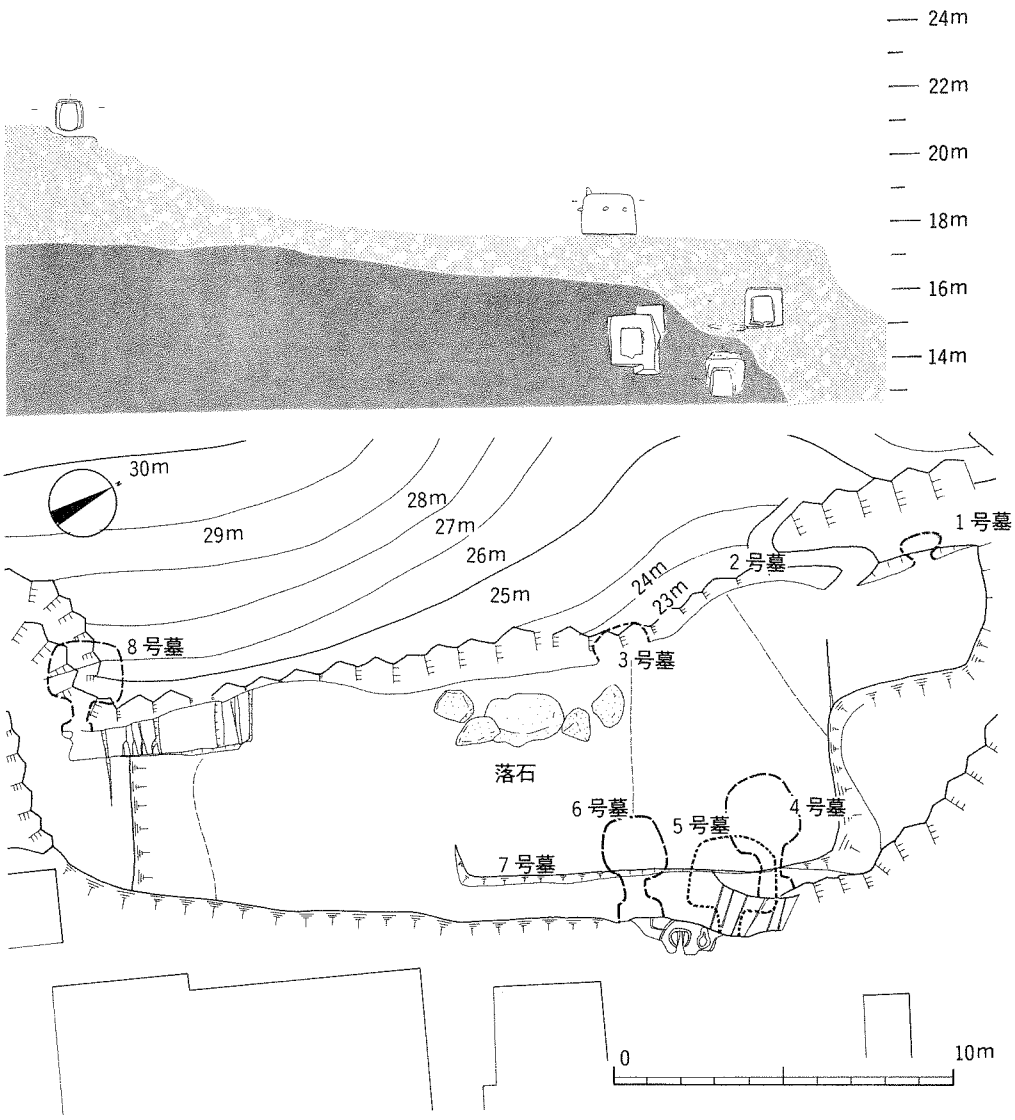
８号横穴墓（第９図）

調査地区の南端に位置し、テラス状平坦部より上方の一群（９号墓～12号墓）に属するものである。テラス状平坦部と横穴墓の羨道をつなぐ、岩盤削り出しの階段が設けられているが、その時期は特定できない。横穴はおおよそ東南方向に開口する。玄室床面のプランは隅丸の方形で、玄門付近から羨門部に向かってやや幅の狭くなる羨道門部につづく。床面は奥壁部が高く、緩やかに入り口へ下がっていくが羨道部は傾斜が強くなる。玄室の北西隅から羨道にかけて浅い排水溝が掘り込まれている。

IV　ま と め

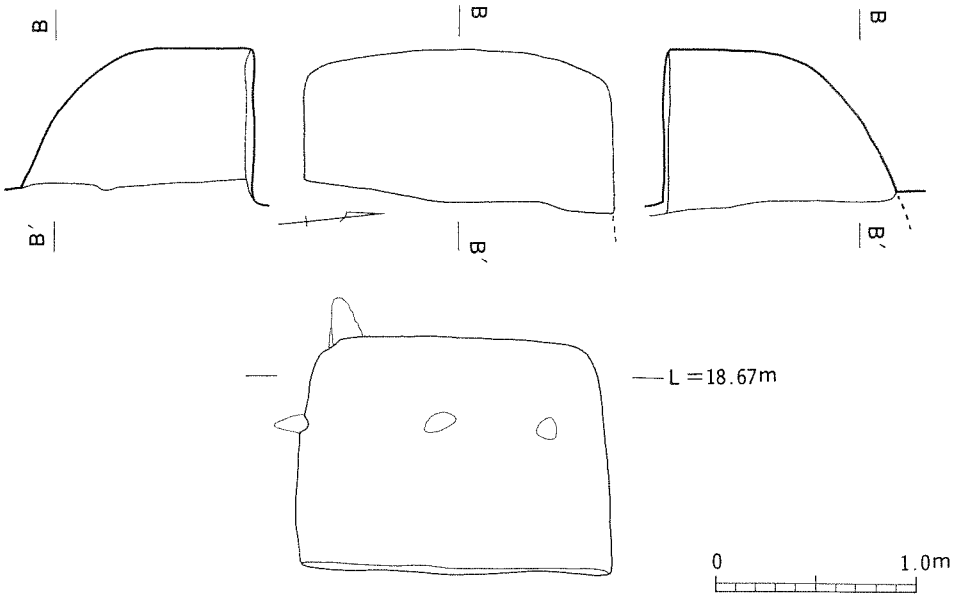
今回調査した横穴墓はすべて開口しており物置等に使われていた。玄室の床面には副葬品はもとより敷石なども見当たらず、それらの有無についてはなんの手掛かりも得られなかった。

現在の等高線図や横穴墓の垂直・平面分布から見て、横穴墓造営時における本調査区の状況は以下のようであったと推測される。



第4図　上小倉横穴墓配置図　$S=\frac{1}{100}$

すなわち、1号横穴墓から3号横穴墓にかけては等高線に添った崖面が形成されていたであろう。また現在のテラス状平担地も、4号横穴墓の入り口がテラスの東端崖面に掘り込まれていることからみて少なくとも横穴墓掘削の時点には現状に近い状態であったと思われる。5号横穴墓、6号横穴墓、7号横穴墓の入り口は4号横穴墓よりもさらに一段下位の崖面に有り、5号横穴墓と7号横穴墓の入り口部が若干削平を被ってはいるが古墳時代と大きく地形が変わった様子は見られない。8号横穴墓と同一群と考えた9号横穴墓から12号横穴墓は、玄室の奥壁部分がかろうじて残る程度まで削平を受けており、それらの前面は幅の狭いテラスとなっている。第3図の地形図からも復元できるように本来は急な傾斜面が有り、墓道なども設けられ



第５図　３号横穴墓実測図

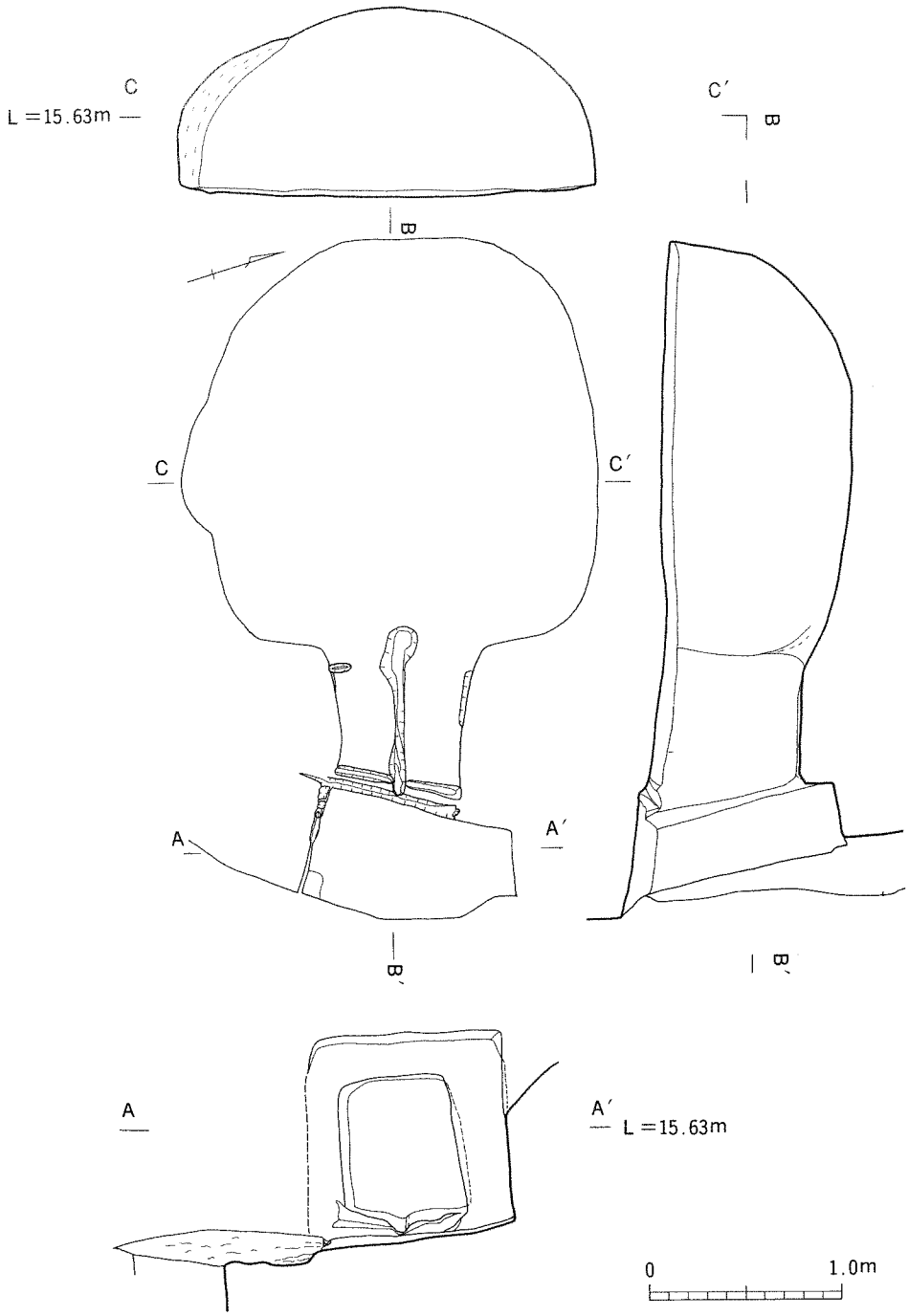
ていたのではないだろうか。

調査した横穴墓はすべて天井部が緩いドーム状を呈すものである。基本的に玄室、羨道、前庭から構成され、羨門には飾り縁が設けられている。玄室から羨門部にかけて排水溝も備えている。内部の壁面には鉄斧様の工具痕と思われる掘鑿時の生々しい跡が観察される。

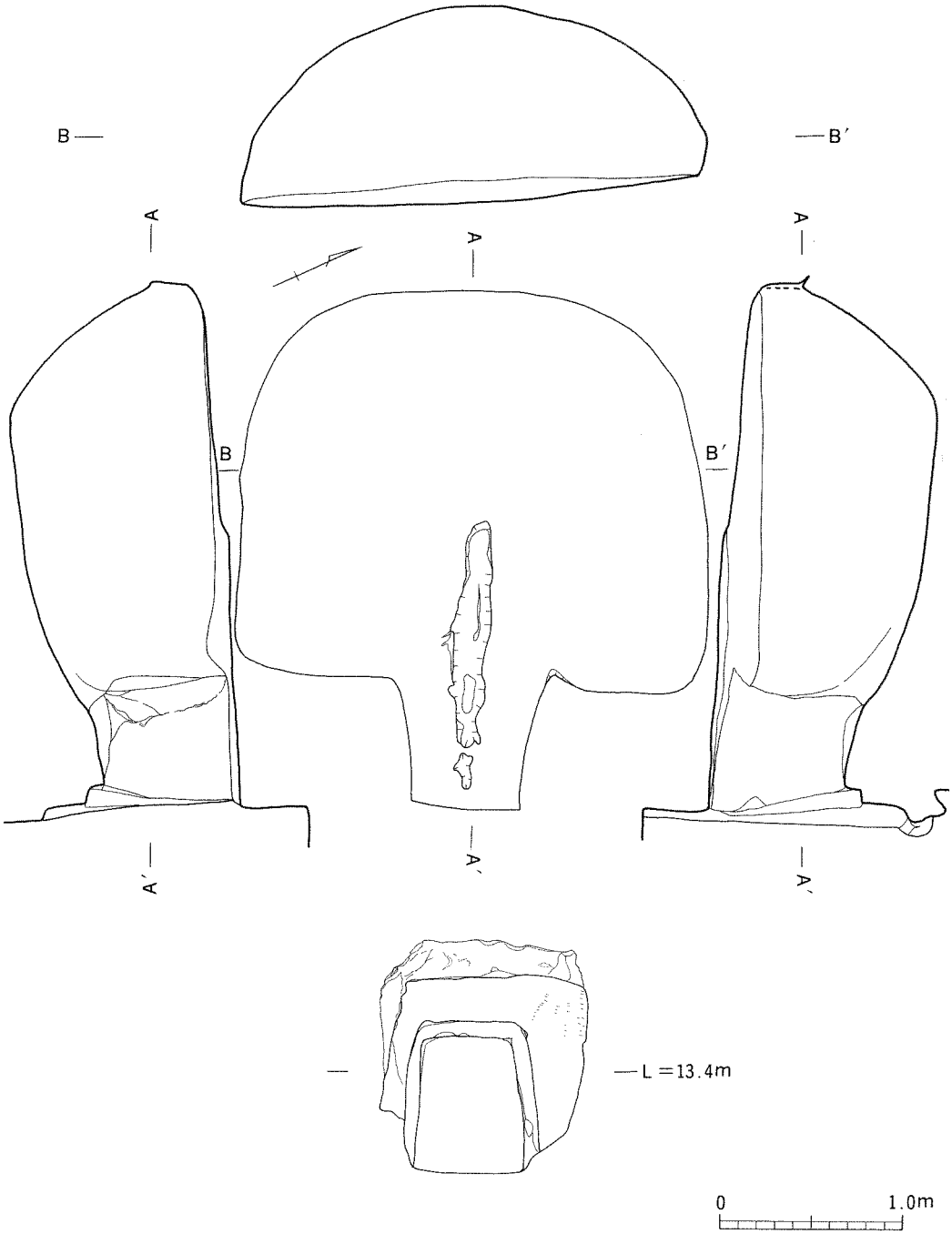
以上の特徴は大分県下、とりわけ旧豊後地方にある他の横穴墓にも観られるもので、ほぼ共通の形式に属すものである。近年の研究によれば、初期の横穴墓は古墳時代後期、西暦５世紀後半代に旧豊前地方を中心にする地域において出現し、その後全国各地へその形式が伝わっていったと考えられる。豊後の大野川流域で最も時期の遡るものは、三重町の十六山横穴墓や竹田市扇森山横穴墓、大分市の高来山横穴群の一横穴墓等で、５世紀後半～６世紀末・前葉のものである。以後６世紀中頃以降～７世紀前半代にかけて、各地で横穴墓の造営が盛んになる。

調査後、上小倉30号横穴墓出土と伝えられる須恵器を実測しえたが(第10図)、田辺陶邑編年のＴＫ85式およびこれ以降のものである。これによっても上小倉横穴群の造営が遅くとも６世紀後半に始まったことを想定することができよう。今回調査した横穴墓の造営時期は、その形態上の特徴から６世紀後半代～７世紀初頭のいずれかと考えられるが、上記の想定と矛盾しない。

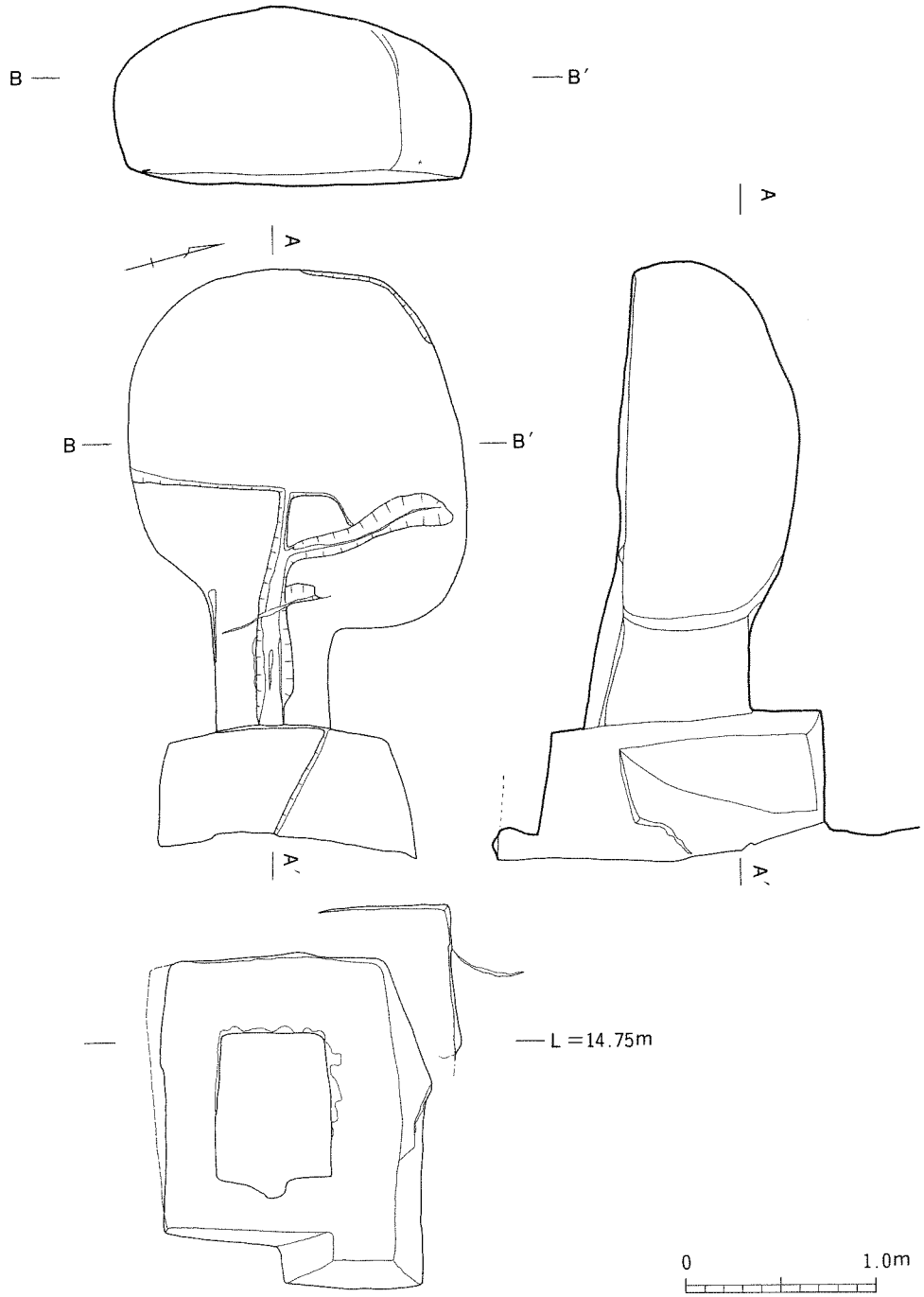
５号、６号、７号墓に見られるように、数多く群集する横穴墓群も数基を一単位にする場合が珍しくない。古墳時代にあって、その単位はどのような意味をもっていたのか？横穴に葬ら



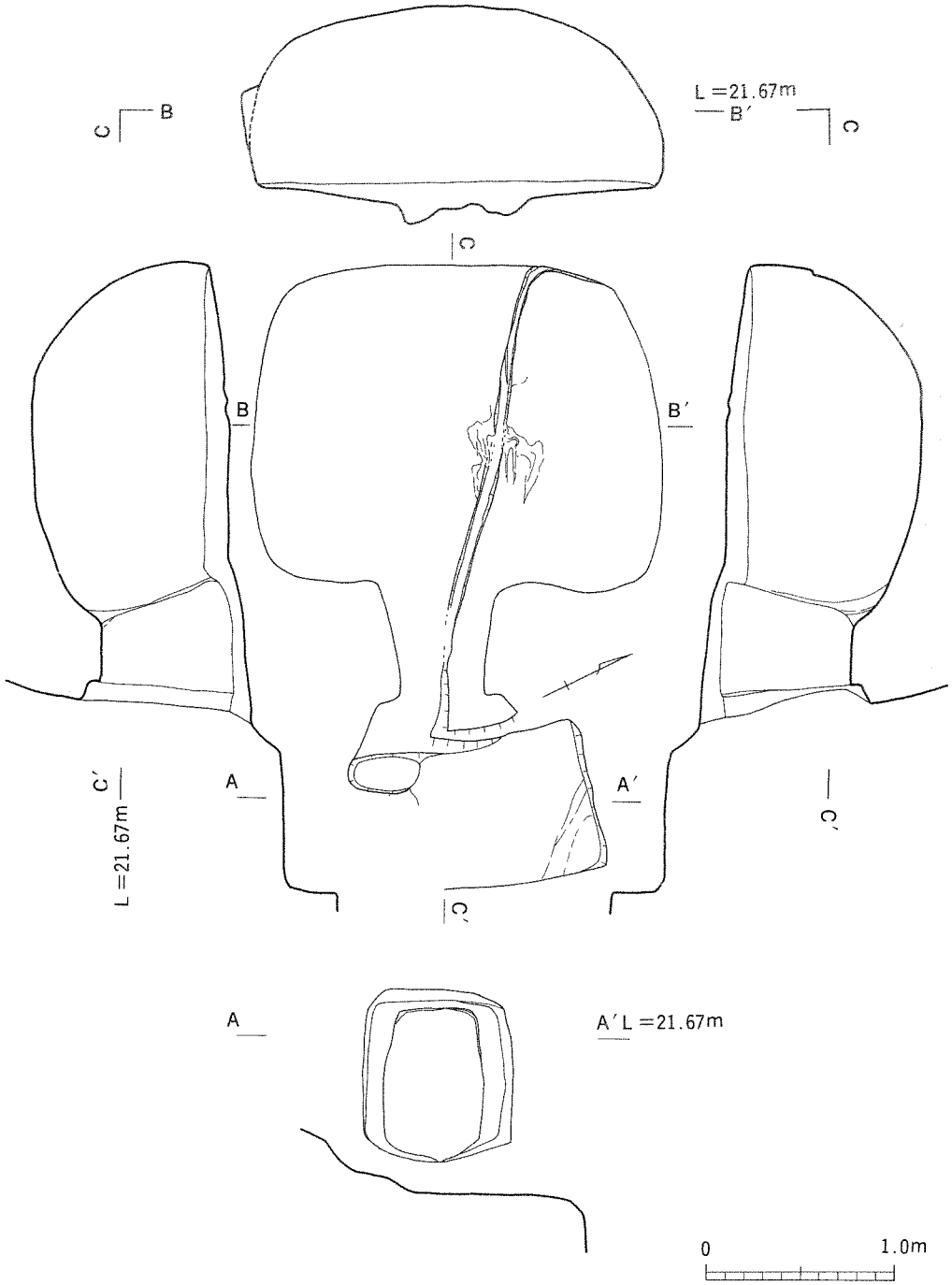
第6図　4号横穴墓実測図



第７図　５号横穴墓実測図



第８図　６号横穴墓実測図



第 9 図　8 号横穴墓実測図

れた人々はいかなる階級、あるいは階層に属していたのか？様々な見解が提出されているが、いずれも定説とはなっていない。一般に横穴墓は世代を追って累代墓的に造営されているようで、鉄鏃、鉄刀、あるいは馬具等を副葬することも稀ではないことから見て、横穴墓造営の主体が社会的に安定した、少なくとも２～３世と継続する「イエ」であることは否定できない。在地における首長層、および彼等に連なる比較的自由な身分層の採用した墳墓形式が横穴墓であったのであろうか。古墳時代後期から歴史時代にかけて顕在化する横穴墓の造営者達についての研究が進めば、当該期における各地域の失われた政治、文化の復元、理解に多大の寄与をなすことは明らかである。県南最大規模の横穴群である上小倉横穴墓群の存在価値は非常に高く、防災上の配慮は言うまでもないが今後とも保存、調査、活用に努めねばならないであろう。

参考文献　村上久和「豊の横穴墓」『えとのす』29、1985
清水宗昭・玉永光洋『十六山横穴墓群の調査』三重町教育委員会、1983
吉武学『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会、1985
杉崎重臣「木ノ上・高来山の横穴古墳」『大分県地方史』第32・33号、1964
渋谷忠章・真野和夫『飛山』大分県教育委員会、1978
広瀬和雄「群集墳序説」『古代研究』第15号元興寺考古学研究所
村上久和他『上ノ原遺跡群』Ⅰ～Ⅴ、大分県教育委員会、1982～1986

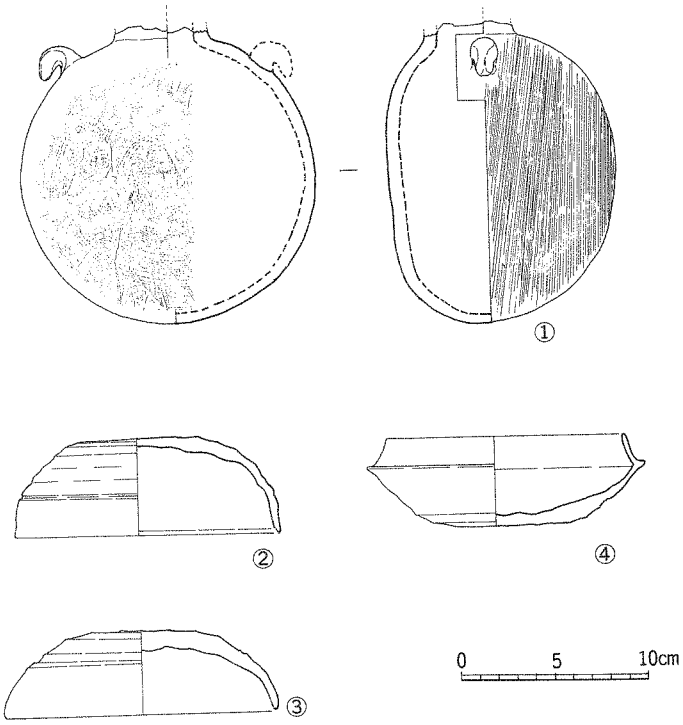
※関連遺物（第10図）

① は提瓶で、頸部を欠く。
肩部に紐掛けの耳を有す。
胴部両面には細い同心円状のカキメがみられる。

② は坏蓋で、天井部およびやや下った部位にヘラ削りが施される。体部と口縁部の境には明瞭な段がある。
口縁端部は軽い稜が残る。

③ も坏蓋である。器高が低くなっている。回転ヘラ削りは、天井部から体部上部にかけて施されている。口縁部は外に開き気味で、端部は無段。

④ は坏身。口縁部は内傾する。
底部付近のみに回転ヘラ削りがみられる。



第10図　関連遺物実測図

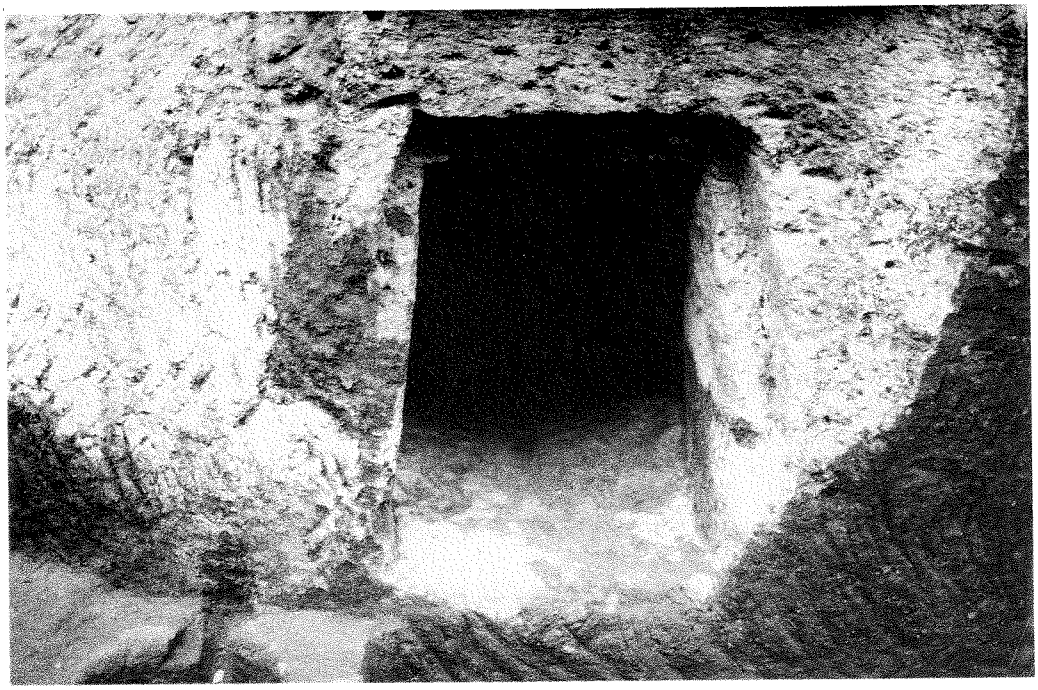
図版 1

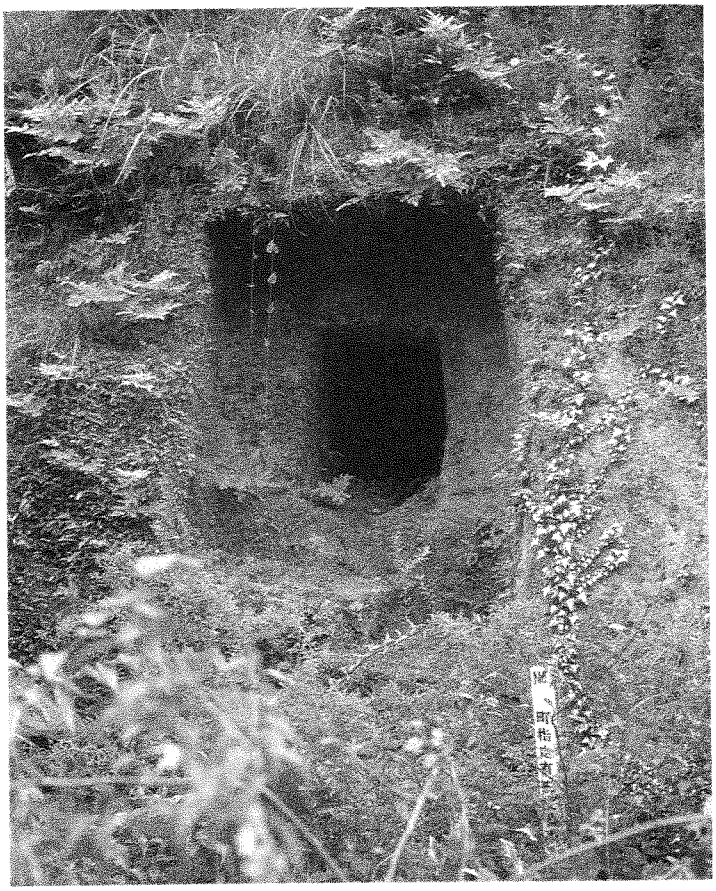
調査風景（上　8 号墓付近，下　4 号墓付近）

図版 2

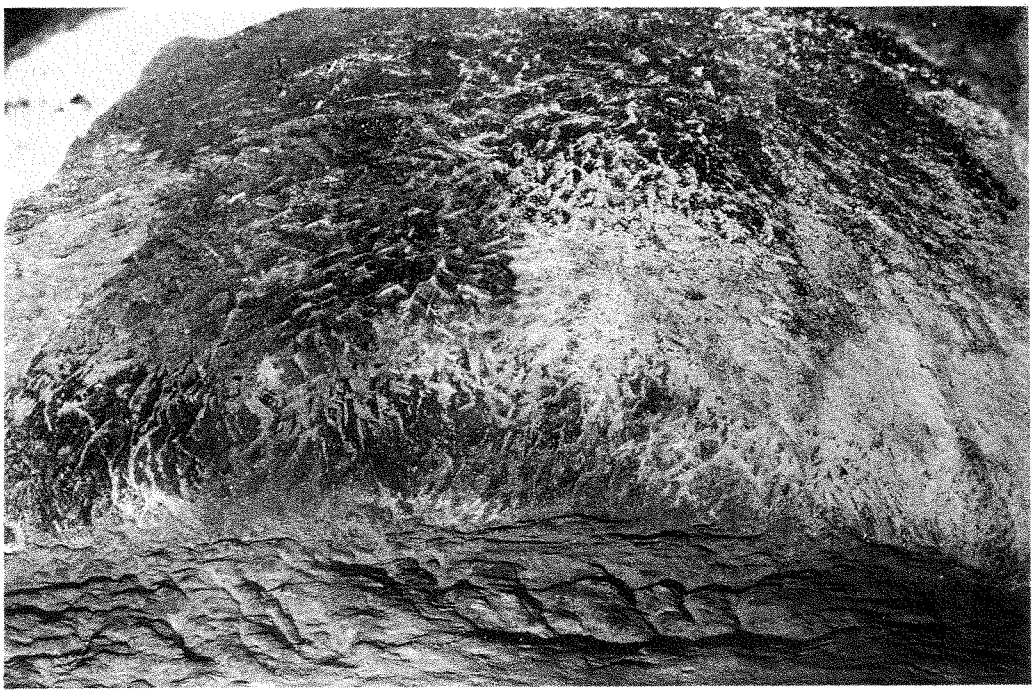
上　4 号横穴墓羨門の床面
左　4 号横穴墓正面

図版 3





上　5 号横穴墓正面
左　6 号横穴墓（調査前）



上　4号墓玄室の奥壁，下　8号墓の床面排水溝

上　小　倉　横　穴　墓

大分県南海部郡弥生町大字上小倉
所在の横穴墓発掘調査報告
弥生町文化財調査報告第１集

平成３年３月31日

発行　弥生町教育委員会
印刷　佐伯印刷株式会社